

きずな

K I Z U N A

特集
テーマ

子ども

ともに育ちあう



- ② 「言葉の責任」
柳田邦男さん(ノンフィクション作家)
- ③ のじぎく文芸賞優秀賞作品
「サギの親子」
内藤廉哉さん(姫路市立中寺小学校6年(受賞当時))
- ④ 「子ども虐待を防ぐために ～子育てのSOSを出しやすい社会に～」
奥田由子さん(NPO法人 子どもの虐待防止ネットワーク・しが 理事長)
- ⑤ 「児童虐待と児童養護 ～新しい力、地域で支える子どもたちの暮らし～」
野口啓示さん(社会福祉法人 神戸少年の町児童家庭支援センター長)
- ⑥ 「安心して過ごせる毎日の遊び場・居場所づくり」
認定NPO法人「放課後遊ぼう会」(宝塚市)
- ⑦ 「『刑を終えて出所した人への支援』～職親企業として～」
黒川洋司さん(株式会社プログレッシブ 代表取締役)
- ⑧ 情報ふらざ



兵庫県マスコット
はばタン



言葉の責任

ノンフィクション作家
柳田 邦男さん

たった一言が
人の心を傷つける。
たった一言が
人の心を温める。

地方のあるお寺に立ち寄り、本堂の前で手を合わせて、ふと気がつく。賽銭箱の横に毛筆で書いた簡潔な文章をプリントした紙が厚さ十センチほど積んで置かれていた。そこに書かれていた文章が、冒頭に掲げたものだ。

べつに新しい言葉ではない。古くから伝承されてきた名言だ。だが、毛筆の文字が美しかったので、私も一枚頂いて帰った。

この言葉は、人と人をつなぐコミュニケーションが携帯電話やスマホやパソコンなどに依存するようになった現代社会において、特別に重要な意味を持つようになった。それは、なぜか。

デジタル機器を介するコミュニケーションは肉声の響きや目の色、顔の表情や手などのしぐさやスキンシップを省いた言葉だけのやり取りに終始する。人間本来の豊かなコミュニケーションはそういう肉声や目など様々な身体的表

現(非言語)コミュニケーションの役割が七十〜八十パーセントを占めていて、言葉の役割は二十〜三十パーセントに過ぎない。

ところが、携帯・スマホなどによるコミュニケーションにおいては、言葉の役割がほとんど百パーセントを占めるため、言葉を発信する側は、ちよつと言ってみただけといった軽い気持ちでいても、受け止める側は深刻に受け止めて、深く傷つくことが少なくない。まさに「たった一言が心を修復困難なまでに傷つけることになるのだ。」

携帯・スマホなどによるコミュニケーションには、もう一つ、より深刻な問題がある。誰が発信者かわからない架空のネームで、誰か特定の人を中傷する言葉や情報を発信することができるという問題だ。今、各地の小中学校や高校で頻発しているネットいじめは、そういうネットコミュニケーションの特性を利用したものだ。学校によっては、その対応に追われているという。さらに、無料通信アプリのLINEの普及は、発信者側に「既読」の信号が届いているのに返事がすぐ来ないと、それだけで友達関係が壊れるという問題を引き起こして

いる。人間の信頼関係が薄っぺらになっている。

情報モラルの教育を後回しにして、情報のやり取りの便利さ、スピードや楽しさばかりを優先したネット社会の浸透は、一人ひとりの人間が中傷から守られ、自分なりのペースで他者と交わるといいう人間本来の在り方を破壊していると言ええる。自分が発する言葉には自分が責任を負うというモラルの確立に国を挙げて取り組まないと、日本人の精神性は荒廃する。

プロフィール

1936(昭和11)年、栃木県生まれ。1995(平成7)年『犠牲—わが息子・脳死の11日』とノンフィクション・ジャンル確立への貢献が高く評価され菊池寛賞受賞。災害・事故・公害問題や、生と死、言葉と心の危機、子ども的人格形成とメディア等の問題について積極的に発言している。

主な近著に『壊れる日本人—ケータイ・ネット依存症への告別』(新潮文庫)、『「想定外」の震—大震災と原発』(文春文庫)、『言葉が立ち上がる時』(平凡社)がある。翻訳絵本に『ヤクワーとライオン』(講談社)等多数。

のじぎく文芸賞 詩部門 優秀賞作品

姫路市立
中寺小学校6年 ないとう れんや 内藤 廉哉さん

※学年は受賞当時

サギの親子

友達とザリガニをつかまえにいった
家の前の田んぼの用水路だ
なかなか見つからなかった
どんどん進む

バサバサバサッ

突然田んぼの中から白いサギが

二羽飛びだしてきた

二羽はぼくたちめがけて飛んでくる

すざいスピードだ

ぼくたちは必死で走った

サギはぼくたちの頭上すれすれを飛んでくる

なんとか逃げた

ぼくはふと気がついた

サギの巣に近よりすぎっていたのだ

巣の中には卵やヒナがいたのだろう

サギは卵やヒナを守るのに必死だったのだ

自分よりも大きい人間にむかうのは

こわかっただろう

きっと親はみんな子どもを守るのに必死なのだ

必死になって子育てをしてくれているのだ

こわくてどきどきしていたぼくの心の中が

ほわっとあたたかくなった



のじぎく文芸賞 作品集講評より

ザリガニ採りに田んぼに行ったときに、二羽のサギに襲われるという体験を書いているのだが、サギが襲ったのは、自分たちがサギの巣に近づき過ぎたためなんだと気づくところがすごい。卵やヒナを守ろうとして自分たちめがけて飛んできたのだとわかった。そこから自分たちの親も、このサギと同じように命がけで自分たちを育ててくれているのだという感慨を抱く。「こわくてどきどきしていたぼくの心の中が、ほわっとあたたかくなった」という表現がよくその実感を伝えている。

作家・のじぎく文芸賞審査委員 時里二郎さん

子ども虐待を防ぐために 子育てのSOSを出しやすい社会に

親を孤立させていませんか？

ベルギーに暮らす、ある日本人女性は「ここでは産休や育休を取るの当たり前で、赤ちゃん連れには周囲が必ず手を貸し、迷惑扱いされない。日本と比べて、うらやましい」と報告しています。オランダでも、ベビーカーは「国の宝を乗せた女王様の車」と呼ばれて大切にされるそうです。

私たちの社会は、子育てに対する、こういう温かいまなざしに満ちているでしょうか？特に最近の日本では、母親一人に育児の負担がかかる「孤育て」状態がきわだっています。かつては身内や地域のつながりが強く、子育ては協力しあえました。今は、父親も長時間労働で、育児にかかわる余裕がありません。また、格差が増大し、厚労省調査(平成24年)によると6人に1人の子どもが貧困状態で育っています。少子化が問題になってきているにもかかわらず、子育てを親の個人的責任と考えてしまう傾向がまだまだ強く、社会全体で育児を支援する仕組みが遅れているのです。

子ども虐待の背景はさまざまですが、共通しているのは、親が孤立し、誰にも相談しようとしにくいこと。子育てのSOSが出しにくい社会は、虐待を防止できません。

私たち市民にできること

あなたの周りに、気になる親子はいませんか？イライラを子どもにぶつける親、孤立している親…。見て見ぬふりをするのではなく、まず、「おはよう」「いい天気ね」など笑顔であいさつをしてみませんか。目が合うようになれば、「子育ては大変ね」「がんばってるね」など、ねぎらってあげましょう。温かく声をかけているのに、警戒心や反発が強い親がいるかもしれません。それは、子どもの頃から大人に守られた経験が乏しいため、人を信頼できない、相手に弱みを見せられないなど、人間関係に課題を抱えているサインです。親自身が虐待されて育った可能性があります。

さらに、子どもの表情が乏しい、おどおどしている、落ち着きがなく乱暴に

NPO法人「子どもの虐待防止ネットワーク・しが」理事長

おくだ よしこ
奥田 由子さん

なる、夜遅く一人で遊んでいる、着衣や髪の毛がいつも汚れている、親を避けようとする、不自然な傷や打撲の跡がある…。子どもの様子が深刻なときは、行政や警察などに知らせ、連携してください。それが、SOSを出せない子どもと親を救うきっかけになります。

そして、一人ひとりの市民に必要なのは、諸外国と比べて子育てしにくい私たちの社会のあり方に目を向けていくこと。子育てを大切にしない社会に未来はないと思いませんか？

プロフィール



NPO法人「子どもの虐待防止ネットワーク・しが」設立にかかわり、2013年度より理事長。臨床心理士、精神保健福祉士。30年以上、精神科領域にて、幼児から大人まで、また、重い精神病を患う人から子どもの不登校に悩む親まで、さまざまな人々の相談に携わる。現在は、守山こころのクリニック、大津市保健所に勤務。

児童虐待防止24時間ホットライン

こども家庭センターでは、子どもの健やかな成長を願って、子どもと家庭のさまざまな問題について相談援助活動を実施しています。児童虐待の通告や相談については下記へご連絡ください。

兵庫県	TEL
中央こども家庭センター	(078)921-9119
西宮こども家庭センター	(0798)74-9119
川西こども家庭センター	(072)759-7799
姫路こども家庭センター	(079)294-9119
豊岡こども家庭センター	(0796)22-9119

神戸市	TEL
神戸市こども家庭センター	(078)382-2525 (平日8:45~17:30)
(児童虐待夜間休日相談)	(078)382-1900 (上記以外)

児童虐待と児童養護

新しい力、地域で支える子どもたちの暮らし

社会福祉法人
神戸少年の町
児童家庭支援センター長

野口 啓示さん

現在、兵庫県下(神戸市を含む)で、

児童養護施設等に暮らす子どもたちの数は約1500名で、30年前と変わりません。しかし、出生数の減少などにより、県下に暮らす子どもの数は、約半数になっていきます。このことが意味するのは、施設に入る子どもの割合が増えたということです。30年前は1000人にひとりの子どもが施設で暮らしていたのが、今では、500人にひとりの計算になります。この数字を見て感じることは、家庭の持つ家族を維持する力が落ちてきたということです。

人を信じる力

家族の中で起こる問題として、児童虐待(以下虐待)が注目されます。虐待の数は減る気配はなく、毎年増加の一途をたどっています。虐待が問題となるのは、虐待に苦しむ子どもが多くいること、その影響が大人になっても続くという事実です。虐待の影響で私が一番懸念するのは、虐待を受ける環

境の中では、人を信じる力が育ちにくいことです。子どもにとって親は本来、助けてくれる人であり、頼ってもよい存在です。しかし、虐待では、その親が子どもを守る存在ではないのです。これでは、人を信じよと言われても、信じることはできません。人を信じることは、他人を信じることで、そして自分自身を信じることの二つが含まれます。他人を信じられず、そして自分自身をも信じることができな

い子どもがのびのびと成長することなどできないのです。そういつい傷ついた子どもたちの成長を信じ、一緒に生活をしながら、未来に向かって生きていく土台をつくりたいと、兵庫県下には児童養護施設が21(神戸市内13)、乳児院が7(神戸市内3)、そして約150世帯の里親家庭があります。さまざまな子どもがおり、そしてさまざまな問題を抱えています。しかし、希望を持って、子どもたちの生活を支えています。

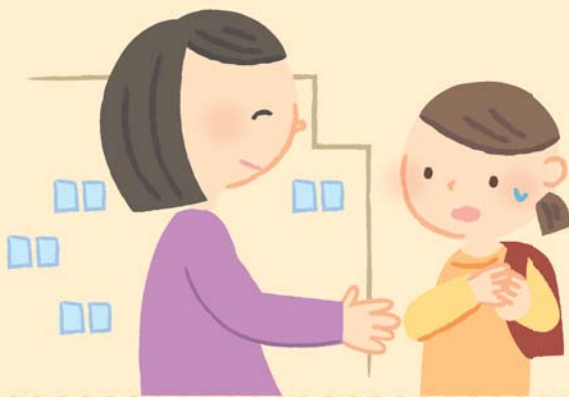
里親が拓く優しい社会

これまで、虐待等で保護された子どもが暮らす場所として、あまり里親が注目されることはなかったのですが、今、国をあげて、里親を増やす運動が展開されています。これは、子どもの養育を施設だけに任せてしまつのではなく、私たちみんなが子どもを支えようという発想です。里親が増えるということは、家庭で生活できなくなつた子どもがみなさんの地域で生活し、そして育つていくということです。知らないところで、だれかが、子どもを育てるといふことではなく、地域で子どもを育てるといふことです。私は里親が増えるということは、社会全体が子育てに責任を持ち、そして子どもたちを支えていく、そういった優しく、充実した社会のはじまりになるのではと考えています。もし、あなたの地域で里親になる人がいて、そして子どもが来たら、ごつか温かく見守り、ときには助けてください。それが社会に貢献することになるのです。

プロフィール



関西学院大学及びワシントン大学大学院で学ぶ。博士(社会福祉学)。神戸少年の町児童指導員、施設長を経て現職。自宅で、妻と7人の子どもの養育に携わる。主な著書に『むずかしい子を育てるペアレント・トレーニング』『むずかしい子を育てるコモンセンス・ペアレンティング・ワークブック』(共に明石書店)





認定NPO法人 放課後遊ぼう会
(取材先 宝塚市立仁川小学校内)

安心して過ごさせる 毎日の遊び場・ 居場所づくり

認定NPO法人「放課後遊ぼう会」は、県からの補助、市からの委託、地域からの支援を受けながら、地域のボランティアと協力し、子どもたちが自由にいきいきと遊べ、安心して過ごさせる毎日の「遊び場・居場所」を提供しています。

やりたいことを思いっきり楽しむ

学校を終えた子どもたちがランドセル

を背負ったまま、次々と「遊び場」に集まってくる。今日は何をしようかと表情もにこやか。「自分の責任で自由に遊ぶ」が合言葉。ここでは、さまざまな遊びができます。

土を盛った土山では、泥んこ遊びや水遊び、運動場ではドッジボールや野球、サッカーなどが人気。室内では、卓球台に列ができ、カプラ(積み木)も人気です。読書や宿題をしたい人には、学習スペースも設けています。「ここに来れば、いつでも遊ぶ友だちがいるし、好きなことができ、楽しい」と2年生の男の子。自分たちなりにルールを決めて楽しんでいきます。

遊びを通じたつながりづくり

このような子どもたちの活動を支えるのは、プレイリーダーとボランティア。プレイリーダーは、けがや事故への対応など安全管理や遊具の整備を担当する専門のスタッフです。ボランティアには保護者や地域の方が登録し、子どもたちの遊びを見守ります。遊び場の開催を重ねることで、PTAにも浸透し、当初は少なかったボランティア登録者は50人近くにもなりました。

「自分の子どもがどのように友だちと関わっているのか、など初めて気づくことも多い。保護者同士の情報交換もできて、参加するメリットは大きい」とボランティアの保護者。

「子どもの成長には、豊かな遊びが欠かせ

ない」と理事長の足立典子さんは考えています。

学校では関わりの少なかった友だちや学年が違う友だちとも一緒に、自分がやりたい遊びで思い切り遊ぶことで、自己肯定感やコミュニケーション力が身に付くといえます。

今では、子どもだけでなく、大人にとっても大切な場所になった「遊ぼう会」の遊び場。参加している子どもたちの中には、さまざまな事情で、居場所を求めてくる子どももいます。そんな子どもたちのためにも、一回でも多く遊び場を開催し、毎日開催できる場所を増やしていきたいと足立さんは抱負を語ります。



学年を越えて、一つのボールを追いかけることも遊びを通して、友だちとの関わり方を学びます。



大量のカプラを使って、巨大オガジエを共同制作。「遊び場」だからできる遊びもあります。

201(平成13)年にボランティアグループとして発足し、2010(平成22)年からNPO法人。「遊び場」は、宝塚市内6小学校で授業終了後～17:00に開催(毎日開催は仁川小学校のみ)。2009(平成21)年には文部科学省「放課後子ども教室推進表彰」を受賞。2012(平成24)年から認定NPO法人。子どもの成長に関わる情報や取組の様子を通信として発信中。

宝塚市仁川台289-1 TEL 0798-54-3956
MAIL houkago-asoubukai@gaia.eonet.ne.jp
HP <http://www.eonet.ne.jp/~houkagoasoubukai/>

『刑を終えて出所した人への支援』

職親企業として

生立ち

私は大阪市東区で生まれました。両親は夫婦間の問題で毎晩喧嘩していました。私は幼いながらも仲裁していた事を今でも覚えています。両親の離婚後、母は生活する事に必死で仕事に追われ、私は父という人生の『師匠』がなく、道徳とは無縁の少年期、青年期を過ごす事になりました。

そんな母の苦労を知る由もなく15才で暴走族、19才で反社会的組織に身を置き、社会に多大な迷惑をかけました。自分中心に生きて来た私を最後まで見捨てる事なく、私の存在を認めてくれていたのは母でした。

心の変化と決意

その母が8年前、急に意識がなくなり2日後に他界しました。それか

らは、今までとは違う生き方をしようとして決意しました。考え方を变えてから沢山の方とのご縁や人間としてどの様に生きていけば良いかを共に学び高め合う場「盛和塾」に入塾できた事が私の人生を大きく変えました。

職親プロジェクトとの縁

社会に貢献したいという思いが強くなりだした頃、『干房』の中井社長から職親プロジェクトに参加しないかとお声をかけていただきました。これこそ負の経験価値を活かして、僕が世の中に貢献できる事だと思ひ、即答で了承させていただきました。

元受刑者を採用してからの挫折感と喜び

2013(平成25)年の12月に少年院から仮退院した少年を採用いたしました。当初はきちんと挨拶もできない、30分も立つ事ができない、感謝の心、道徳感もなく、平気で自分をかばうための嘘をつく等、裏切られる事も沢山あり、何度も心が折れそうになりました。

しかし、私が変われた様に、彼にも『良心』がある事を信じて諦めずに共にもがきながらも、1年2ヶ月が過ぎました。まだまだ問題はありますが、1年前と比べると仕事もできるようになり、他者の事も思いやれる

プロフィール



1971(昭和46)年大阪市生まれ。少年の頃から非行に走り暴走・窃盗・傷害を繰り返し更正する事なく、反社会的組織に入る。母親の死をきっかけに今までとは違

う命の使い方をすると決意する。現在は大阪府内に美容室「merry」を4店舗経営。若者が過去の過ちを改めて働く事を通じて、共に生き方を進化させる事を目的とした実践の学び場「良心塾」の塾長を務める。

自分の経験からの気づきと職親企業として共に目指す社会

ようになつたと思いません。私も人が成長する事の喜びを実感させていた

ただいた時から、道を踏み外してしまっている若者に対して、誠の更正をしてもうには職を与えるだけではなく、私と同じように変わる環境や、自分の存在を認めてくれる人の存在があること、そして人間としてどの様に生きていけば良いかを考え、生きる目的「志」を明確にして実践できる場所が必要だと思つています。そして私たちがめざす未来は、犯罪などがなくなり、子どもたちが皆に愛され、幸せな家庭で育ち、平等な教育(徳育)が受けられ、夢と希望に満ちた社会になる事です。

ルポ 新着図書紹介

虐待の連鎖は止められるか



著者 共同通信「虐待」取材班
発行所 岩波ブックレット

親からひどい虐待を受けた子どもが傷を抱えながら成長し、今度は自分子どもに虐待をしてしまう。そんな不幸な事件が後を絶ちません。本書には、そうした経験をもつ親たちの過酷な現実が報告されます。

2010年大阪市で起こった虐待事件をきっかけに、共同通信大阪社会部の記者数人が、実際の虐待事件の取材を開始しました。記事は、2010〜2014年までの間、長期連載企画として全国の地方新聞などに掲載されました。本書は、この連載記事を加筆・修正して一冊にまとめたものです。

虐待の実態とはどのようなものか。虐待をしてしまう親の心理とは。そして、私たちには何ができるのか。本書では、記者一人ひとりが、虐待の問題を自らの問題としてとらえ、その実相に深く迫っています。虐待にどのように向き合うべきか考えさせられる一冊です。

きずなトピック

株式会社プログレッシブ
代表取締役

黒川 洋司 さん

子どものSOSをキャッチする 「子どもの人権110番」

「いじめ」や体罰、不登校や親による虐待といった、子どもをめぐる人権問題は、周囲の目につきにくいところで発生していることが多く、また被害者である子ども自身も、その被害を外部に訴えるだけの力が未完成であったり、身近に適切に相談できる大人がいなかったりする場合が少なくありません。

「子どもの人権110番」は、このような子どもの発する信号をいち早くキャッチし、その解決に導くための相談を受け付ける専用相談電話であり、子どもだけでなく、大人もご利用可能です。

電話は、最寄りの法務局・地方法務局につながり、相談は、法務局職員又は人権擁護委員がお受けします。相談は無料、秘密は厳守します。法務省のホームページでも相談を受け付けています。



電話番号 フリーダイヤル **0120-007-110** 全国共通・無料

受付時間 平日午前8時30分から午後5時15分まで 注)IP電話からは接続できません。

イベントガイド

<p>(姫路市) 第1回 人権学習地域講座</p>	<p>日時 5月11日(月) 14:00~16:00 場所 姫路市立図書館網干分館 ※山陽電車「網干」駅下車西側すぐ ※駐車場がありませんので公共交通をご利用ください。 「高齢者介護をめぐる家族危機」 ●講師 関根 聡(大阪女学院大学・短期大学准教授)</p>	<p>問い合わせ 姫路市人権啓発センター TEL 079-282-9801</p>
<p>(神戸市) ハートフルシネマ サロン</p>	<p>日時 5月12日(火) 昼の部13:30~16:30 夜の部18:30~21:30 場所 神戸文化ホール 中ホール ※神戸市営地下鉄西神・山手線「大倉山」駅から徒歩1分 人権映画「手紙」及び人権啓発映画「親愛なる、あなたへ」の上映 ※無料。一時保育(10名まで)あり。申し込みは、電話・ファックスで受付。</p>	<p>問い合わせ 神戸市保健福祉局人権推進課 TEL 078-322-5234 FAX 078-322-6048</p>

インターネットで「人権文化をすすめる県民運動」の様態を配信中!

人権文化をすすめる 動画

検索

人権に関する川柳を募集します!

いずれかのテーマに当てはまる川柳を募集します。優秀作品は「きずな」に掲載し、オリジナルクリアファイルをプレゼント。

募集テーマ 多文化共生、同和問題、高齢者

応募方法 はがきか、ファクス、メールで受け付け。郵便番号、住所、名前(ペンネーム使用の場合も併記)、年齢を明記の上、ご応募ください。5月22日(金)締め切り。(応募はお1人1点とします。)

インターネット上を含む未発表・未投稿の自作の作品に限りです。

応募先 (公財)兵庫県人権啓発協会(下記参照)



本号の編集集中にも、子どもに関する痛ましい事故や事件が後を絶たず、いたたまれない気持ちになります。

子どもの生きる権利、守られる権利、育つ権利、参加する権利などを保障したものに「子どもの権利条約」があります。

学校では授業の中で扱うこともあるようですが、私たち大人は、その内容に触れる機会はそれほど多くないのではないのでしょうか。

条約と聞くと難しく感じますが、丁寧な説明を加えているホームページも見受けられます。私も「子どもの権利条約」を通して、子どもたちの人権について改めて考えてみたいと思っています。

(小池)

「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。